

Tamagawa University

Graduate School of Education

教育学研究科

2018



教育学研究科

教育学研究科は、「教員養成の玉川」としての伝統と実績を踏まえた教育学研究を基盤に、乳幼児教育、初等教育、国際バカロレア、教師教育学を中心に高度な研究を行うことを目的としています。本学創立の理念である全人教育の精神に基づき、教育研究を通して培う柔軟な思考力と洞察力で、教育現場の激しい変化や諸問題に対応できる高度な教育実践者・研究者を育成しています。教育学専攻を修了することにより、幼稚園教諭専修免許状及び小学校教諭専修免許状の取得が可能です（履修科目の選択に条件があります）。



教育学専攻

教育学研究科教育学専攻では、教育の学的理論を確立するための研究に力点を置きつつ、教育学的理論と教育実践の合一を目指して、教育研究のスペシャリスト及び高度な教育実践者を養成します。研究指導を核として、マンツーマンに近い指導体制を整え、個のニーズに対応した教育を行っています。また、学会発表助成制度など、より活動的な学修環境を整え、改善するよう努めています。さらに、ティーチング・アシスタント制度や奨学金制度などを通して、経済的な負担の軽減を図っています。



研究コース

教育学研究コース

教育学研究コースは、学部で受けた教育学に関する知識を基盤とし、教育諸科学における理論的研究を深め、教育学研究に貢献する研究者の養成を目指しています。教育学基礎科目群を中心に学修し、教育学を幅広く理解するとともに、自分の専門領域を「教育学特別演習」等の科目で掘り下げていきます。修了後は大学院博士課程への進学等が考えられます。

履修方法等

教育学基礎科目群から16単位以上、特別演習科目群から6単位を修得します。

1

乳幼児教育研究コース

★夜間も開設

幼児教育や保育の世界は平成27年度から始まった「子ども・子育て支援新制度」によって大きな変革の流れの中にあります。このような時代の趨勢を踏まえ、乳幼児教育研究コースは、大学の学部卒業者はもちろん、幼児教育・保育の実践の場で働く方や、主任・園長など中核になる方の研究の方向性を視野に入れたカリキュラムを提供していきます。

履修方法等

教育学基礎科目群から8単位以上、教育学発展科目群の乳幼児教育研究コースから8単位以上、特別演習科目群から6単位を修得します。

2



TOPICS

主な修士論文テーマ例

- 保育環境が幼児の運動能力に及ぼす影響についての一考察
- 個を生かす教育に基づいた小学校授業の研究
- ESD (持続発展教育) の視点を導入した中学校社会科授業の実践的研究
- 初等教育における自然体験を通じた教育的価値に関する研究
- 国際バカロレアの目指す思考力とその評価方法に関する研究

初等教育研究コース

初等教育研究コースは、学部教育を基盤とし、教育学の理論的研究から授業実践や児童理解、学校制度と社会との関連など、内容が多岐にわたります。最新の教育課題を積極的に扱いながら、大学院生の問題意識を深めるような教授や支援を行います。学校の現代的な課題である、コンピュータ教育や小学校授業研究、特別支援教育に関する授業も用意しています。

履修方法等

教育学基礎科目群から8単位以上、教育学発展科目群の初等教育研究コースから8単位以上、特別演習科目群から6単位を修得します。

3

IB (国際バカロレア) 研究コース ★★夜間も開設

社会のグローバル化によって、教育の世界も国境を越えて考える時代が来ています。IB研究コースは、世界の多くの国の大学進学資格として認められるIBを提供する学校の教員やIBの普及に関連する職業に関わることを前提に平成26年度に開設されました。IB校で教員となるための資格や、IB教員資格を取得するための指導的役割を果たす人材育成を行います。

履修方法等

教育学基礎科目群から8単位以上、教育学発展科目群のIB研究コースから12単位、特別演習科目群から6単位を修得します。

4

教師教育学研究コース

★★夜間も開設

大学の教員養成課程における教員には、大学院等で主に教育学等を研究してきた教員と、学校での実務経験を基盤とする教員とに大別されます。平成26年度に開設された教師教育学研究コースは、学校教員経験者を主な対象として、それまでの実践経験を理論と融合させるための科目を開設しています。修了後は大学教員になること等が想定されています。

履修方法等

教育学基礎科目群から8単位以上、教育学発展科目群の教師教育学研究コースから8単位以上、特別演習科目群から6単位を修得します。

5

*修了には、各コースの要件をみだし、合計で30単位以上を修得するとともに、修士論文についての審査および最終試験に合格する必要があります。



教育学研究コース 2年
河合 宗汰さん

教育そのものについて考える

voice
1

私は玉川大学教育学部を昨年の3月に卒業し、同年4月から同大学の大学院教育学研究科へと進学しました。もともと、小学校の先生になりたいとの思いから入学した教育学部でしたが、4年間の様々な講義を受けていく中で、私自身の「教育学」への未熟さを強く感じました。児童にとって、先生の授業や生活指導、それ以外の一挙手一投足、その全ては学びの機会になるものだと感じながらも、その学びの機会を、より良いものとして与えるための「知識」が自分には不足していたのです。私は、このまま「知識不足の先生」として現場に立つことは出来ないと感じ、教育学そのものについて考えることのできる、教育学研究コースへと進学しました。大学院は、自分自身がやりたいと思ったことを、すぐ行動へと移すことのできる、とても恵まれた場だと感じています。学修の面においても、本を読み、論文を読み、院生と教育学について語り合い、疑問点があればそこを突き詰めようとする事が出来ます。普段の学生生活においても、自分のために使える時間がかなり多く与えられていますので、自分の知りたいことを調べる、学部生の後輩たちが行う様々なコミュニティに顔を出すこと、ティーチング・アシスタントやボランティア、小学校で引率の経験をする事も出来ます。いろいろな経験をして様々な立場を知っているということは、人として、もちろん先生としても深みを増すことにつながるでしょう。私自身はそのような先生に学びたい、そのような先生になりたいと思います。大学院は、その機会に恵まれた場となるはずで



IB(国際バカロレア)研究コース 2年
古屋 佑奈さん

未来への希望が詰まった「教育」の担い手を目指す

voice
2

私は、大学で教員免許を取得後、学校現場で1年、民間企業で4年の社会人経験をしました。これらの経験のなかで、自分の考えを表現することや、多様な価値観を受容することの重要性を感じていた時に出会ったのが「国際バカロレア(IB)」でした。「共感する心を持って生涯学び続ける事」を理念としているIBの教育プログラムが、日本の教育にとって重要であると強く感じたことから、IBを専門的に研究できる本学への進学を決意しました。大学院には、様々なバックグラウンドや考え、価値観を持った方々が在籍しており、授業で多様な専門性を身につけることができるだけでなく、教授と共に学ぶ仲間との日々の会話も、全てが学びの機会になります。また、学修の拠点となる大学院生室は図書館に直結しており、学びを深める最適な環境が整っています。文科省は2018年までに、国内の「国際バカロレア(IB)」認定校等を200校にするという目標を掲げています。決められた教育方法や教材が存在しないIBを実施していくことは容易ではないと思われませんが、その分限りない可能性を秘めている教育だと、私は感じています。IBには従来の日本の教育とは異なる要素が多分に含まれており、日本の教育の大きな転換となり得ると考えます。そのような、未来への希望が詰まった「教育」の担い手の一人になれるよう、仲間とともに日々研究に取り組んでいます。



乳幼児教育研究コース 2年
峰友 航さん

毎日が大きな刺激

voice
3

私は大学時代に幼児教育を中心に、社会教育や国際バカロレア(IB)についても学んできました。それらは一見、何も関係のない分野であると思われるかもしれませんが、それぞれの分野を学んでいくうちに不思議と私の中で繋がっていきました。この4年間の学びが繋がり、もっと多く深く学びたいと思い、大学院進学を決めました。大学院では、乳幼児教育研究コースに所属していますが、大学時代に引き続き国際バカロレアの授業にも参加し、免許取得を目指しています。このようにコース以外の授業にも参加でき、色々なコースの人達と共に学ぶことにより多角的な視点を持つことができるのも本学の良い所だと思います。乳幼児教育研究コースでは参加型の授業が多く、ディスカッションをしたり、発表したりする機会に恵まれています。ディスカッションをすることにより様々な考え方に触れ、発表することにより自分自身の考えをまとめることができ、参加型の授業が深い学びになっています。また夜間開講科目が開設されているので、教育現場で働きながら通っている仲間もいます。そのような背景を持つ仲間たちと共に授業を受けることにより、実際の教育現場の声を聞きながら学ぶこともできています。

このように大学院では、様々な背景を持つ仲間と共に、自発的に学ぶことにより私自身毎日が大きな刺激であり、とても充実した日々を過ごしています。

voice
4

学びを生かし、現在の仕事に役立てる

大学卒業後は大学病院勤務を経て子育てと共に20年間、看護師・保健師として様々な臨床の経験をする機会に恵まれました。現在は保育士養成校で保育士を目指す学生に、保育に関わる保健・医療を教える授業を担当しています。

近年、保育現場では医療知識がさらに必要とされてきており、養成校においてもその医療教育の質を問われる現実があります。私は、大学での専攻は看護であり、看護養成校の授業の経験はありましたが、保育士を対象とした教育について学ぶ機会はありませんでした。そんな教員としての質を高め、保育の現場に役立つ医療の知識をしっかり教えたいと思い、教育を学びたいと思ったことが入学のきっかけです。仕事を行いながらの勉強に不安はありましたが、夜間開講の授業も選択することができたので、社会人でも時間の調整を行いながら履修できることが魅力です。

教育学研究科は、教育に関わる心理学系研究授業、障害児教育研究、幼児教育研究、研究方法など多彩な授業を取ることができ、また丁寧に学べます。先生方もとても熱心で指導にあたってくださいませ。しかし思っていたよりも勉強・課題に時間がかかり、集中して勉強をしないと終わらない毎日です。また教師を教育するという「教師教育学」の授業は全く知らなかった分野で、この学びを生かし、現在の自分の仕事に役立てていけるのではと思っています。

2年間で卒業することが目標で、現在我が家は息子が大学3年、大学生が私を含めて2人ということになります。子どもと一緒に勉強ができることはとても有意義で幸せだと感じています。



乳幼児教育研究コース 2年

木村 美佳さん

voice
5

「多角的に捉える能力」の育成

私が大学院に進学した理由は、現在の教育に疑問を抱くことが多々あり、「教育」という唯一無二なものが分からなくなってしまったからです。私にとってIBとは「ある事象に対して多角的に捉える能力」を育んでくれるものだと感じています。現代の日本には、まだ「学力=知識量」という価値観が強く残っていると思います。しかし、今後日本の教育に求められるのは、知識を鵜呑みにするのではなく、「なぜその知識が必要なのか」「獲得した知識の活用」であると私は考えています。そのために「ある事象に対して多角的に捉える能力」の育成が大切であり、その手段の一つがIB教育であると考えています。

私自身、今まで自分のことを深く考えることはありませんでしたが、大学院での生活を通して、様々な背景を持っている人と接することができ、自分の考えと他人の考えの違いというものを違いとして認識することができました。同時に自分に対して多角的に捉え、自分の考えがどういふものであり、どのように学修すれば自分が理解できるのか、本当に自分は理解できているのか、ということなどを常に考える機会ができました。このように大学院での時間は、自分を高め、今後の人生に大きく影響を与えるだろうと強く感じています。

全人教育を教育理念に掲げている国際バカロレアを、玉川学園創業者・小原國芳が提唱した「全人教育論」を実践している本大学院で学べるのは、非常に意味があると思います。



IB(国際バカロレア)研究コース 2年

秋山 大地さん

voice
6

“質の高い保育”とは

大学卒業後、私立幼稚園に就職し、遊びの重要性を感じながら日々保育をしています。就職して5年目になりますが、子どもたち一人ひとりの興味関心の違いから、その子らしさをより輝くものとして引き出していく毎日の「遊び」が最も大切であることと、楽しさを感じています。

そして、「質の高い保育」はどのようなものなのか、日々保育を実践していく中で学ぶ必要があると強く感じました。また、連携を深めていかなければならない保護者の方々が、「遊びの大切さ」、さらに「遊びの中の学び」についてどのように受容しているのかについても関心を持ち、「家庭連携」に焦点を当てて研究してみたいと考えました。私の家は認定こども園を運営しているということもあり、将来的には私が園の経営者となることを視野に入れています。幼児教育を改めて学び直すことで、確かなものを発信していけるリーダーになりたいと思っています。昨年度より、本学では乳幼児教育コースに夜間開講科目が開設され、仕事をしながら学ぶことができるという事を知り、チャレンジしてみようと思いました。大学院は、様々な立場の方々と共に学ぶことができ、とても刺激的であり、自分の世界が広がっていると実感しています。改めて自分を見つめ直すきっかけとなり、大きな励みにもなっております。この大学院での時間は、日々の保育を豊かにしてくれると同時に、将来の自分の新たな展望を開くものだと、実感しています。



乳幼児教育研究コース(夜間) 2年

石井 美和さん

Professors 教員紹介

大豆生田 啓友 教授

専攻分野 乳幼児教育学／子育て支援

研究テーマ／主要著書・論文

研究テーマとしては、保育所・幼稚園や子育て支援施設をフィールドとした、保育実践や保護者支援に関する質的研究。倉橋惣三の保育論に関する研究など、である。

主著として、『保育学講座5・保育を支えるネットワーク支援と連携』（東京大学出版会・編著）、『「対話」から生まれる乳幼児の学びの物語』（学研・編著）、『子ども主体の協同的な学びが生まれる保育』（学研・編著）、『子どもを人間としてみることの意味』（ミネルヴァ書房・編著）、『最新保育資料集』（ミネルヴァ書房・編著）、『よくわかる子育て支援・家庭支援論』（ミネルヴァ書房・編著）、『倉橋惣三と現代保育』（フレーベル館・共著）、『支え合い、育ち合いの子育て支援』（関東学院大学出版会・単著）など。近年の論文としては、『保育の場における子育て支援の課題』（日本保育学会「保育学研究」2013年）、「倉橋惣三の家庭教育論に関する一考察―育ての心を手掛かりに―」（玉川大学教育学部紀要論叢2013年）、「保育の質を高めるための体制と研修に関する考察」（関東学院大学人間環境学部人間環境学会紀要、2009年）、などがある。

小原 一仁 教授

専攻分野 高等教育学／比較教育学

研究テーマ／主要著書・論文

主な研究テーマは、①大学経営及び意思決定プロセスにおける数理モデルの実用性の検証と、②国際比較を通じた教育制度（例えば、カリキュラムの接続）や well-rounded education と全人教育の近似性に関する検証。

主要論文は、『米国 boarding school における全人教育』（『全人教育研究センター年報』玉川大学）、「大学経営統合事業戦略モデル」（『基礎研レポート』ニッセイ基礎研究所）、「教員養成課程における大学アーティキュレーション」（『高等教育におけるアーティキュレーションに関する調査報告書』大学基準協会）、「私立大学のスリム化はなにをもたらすか」（『ニッセイ基礎研究所報』ニッセイ基礎研究所）、「大学入試はどう管理されるべきか―EMの現状と大学入試合格者決定手法の一提案―」（『ニッセイ基礎研究所報』ニッセイ基礎研究所）、「Institutional Researchへの示唆―企業、米国大学からの視点」（『大学時報』私立大学連盟）、「第2期大学認証評価の実践と課題―玉川大学における内部質保証―」（『大学評価研究』大学基準協会）、「大学経営政策の意思決定モデル構築に向けての考察―横断的学格付けと全入時代到来時刻シミュレーションを踏まえて―」（『高等教育研究』日本高等教育学会）、「超高齢社会に新たな門戸を開き始めた高等教育機関」（『ジェロントロジージャーナル』ニッセイ基礎研究所）他。

近藤 洋子 教授

専攻分野 母子保健学／公衆衛生学

研究テーマ／主要著書・論文

主な研究テーマは、小児期のライフスタイルや養育環境と健康の関連、学童期・思春期の健康教育のあり方について。最近の研究論文としては、『思春期における健康増進と生きる力育成に関する研究』（玉川大学健康・スポーツ科学研究紀要）、「幼児健康度に関する継続的比較研究（第4回幼児健康度調査）」（平成22年度厚生労働科学研究費補助金（成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業）報告書）、「大学生の家族形成意欲と関連要因に関する調査研究―男女共同参画社会に向けた若者への支援について―」（厚生省の指標）など。著書は『子どもの保健と支援』（日本小児医事出版社）、「新しい時代の子どもの保健」（日本小児医事出版社）、「新生と性の教育学」（玉川大学出版部）、「教養としての健康・スポーツ」（玉川大学出版部）いずれも共著、など。

坂野 慎二 教授

専攻分野 教育行政学／教育経営学／教育課程論／比較教育学

研究テーマ／主要著書・論文

主要著書・論文は、『統一ドイツ教育の多様性と質保証』（単著 東信堂）、「海外の教育改革」（編著 放送大学教育振興会）、「学校教育制度概論」（共著 玉川大学出版部）、「教育課程編成論」（共著 玉川大学出版部）、「若者の働き方」（共著 ミネルヴァ書房）、「高等教育質保証の国際比較」（共著 東信堂）、「高校改革のいま」（共著 学事出版）、「教員の養成・免許・採用・研修」（共著 教育開発研究所）、「教育改革の国際比較」（共著 ミネルヴァ書房）、「学力の総合的研究」（共著 黎明書房）、「学校評価のしくみをどう創るか―先進5カ国に学ぶ自立性の育て方」（共著 学陽書房）、「現代教育制度」（共著 学文社）、「戦後ドイツの中等教育制度研究」（単著 風間書房）、「実践クロスカリキュラム」（共著 図書文化）、「地方教育行政の研究」（共著 多賀出版）、「教員に求められる力量と評価」（共著 東洋館）、「教員の人事行政」（共著 ぎょうせい）、「学校改善の課題」（共著 第一法規）他。

佐久間 裕之 教授

専攻分野 教育哲学／教育史

研究テーマ／主要著書・論文

教職科目との関連で言えば、教職の意義、教育の基礎理論そして道徳の指導法の分野が研究対象である。主な研究テーマは新教育の歴史・思想に関するもので、特に①IB の理念につながるドイツ田園教育塾（ヘルマン・リーツ、クルト・ハーン）と全人教育（小原國芳）の研究、②イエナ・プラン研究（JSPS 科研費 16K04487）に取り組んでいる。

著書に『Educational Progressivism, Cultural Encounters and Reform in Japan』（Routledge / 共著）、「教育原理」（玉川大学出版部 / 編著）、「人間学の名著を読む」（玉川大学出版部 / 共著）、「人間形成のアイデア」（昭和堂 / 共著）、「教育学の歴史」（青土社 / 共訳）、「教職概論」（玉川大学出版部 / 編著）、「アレーとバイディア」（福村出版 / 共著）、「道徳・倫理の未来へ」（清水書院 / 共著）、「道徳教育論」（一藝社 / 共著）、「親が参画する保育をつくる：国際比較調査をふまえて」（勁草書房 / 共著）、「新版・保育用語辞典」（一藝社 / 共著）などがある。

寺本 潔 教授

専攻分野 社会科教育学／生活科教育学／観光教育

研究テーマ／主要著書・論文

研究テーマとして、子どもの遊び空間や環境認知の発達研究、近代日本地理教育実践史研究、地域資源を子どもに見い出してもらおう観光教育を軸とした社会科授業研究などがある。社会科や生活科の検定教科書、小中社会科地図帳などの編集・執筆にも力を入れている。主な著書に『子どもの知覚環境』（地人書房）、「社会科の基礎基本 地図の学力」（明治図書）、「感性が咲く生活科」（大日本図書）、「言語力が育つ社会科授業」（教育出版 / 共著）、「各科指導法 社会」（玉川大学出版部 / 共著）がある。

はら だ まり
原田 真理 教授

専攻分野 精神分析／臨床心理学／医療心理学／教育相談

研究テーマ／主要著書・論文

臨床心理学が専門であり、東日本大震災発災以降は震災支援、特に在京避難者支援および福島県内における母子支援を行なっている。

学校場面においては、災害はもとより、いじめ、虐待など、多数の場面でこころの理解が必要とされる。的確な支援(実践)を可能にするためには、こころの理解(学問・知識)が必要であり、学問と実践という2つの軸が研究・臨床の要と考えている。主な研究テーマは、トラウマ(心的外傷)を受けた人の心理支援・精神分析的視点からみた女性における二重性である。

主な著書は、『教育相談の理論と方法 小学校編』『教育相談の理論と方法 中学校・高校編』(編著玉川大学出版部)『子どものこころ一教室や子育てに役立つカウンセリングの考え方』(単著ナカニシヤ出版)『学級経営論』(共著玉川大学出版部)『女子大生がカウンセリングを求めるとき』(共著ミネルヴァ書房)『カウンセラーのためのガイダンス』(共著ブレイン出版)他。

やま ぐち おき とも
山口 意友 教授

専攻分野 道德哲学／教育哲学／応用倫理

研究テーマ／主要著書・論文

主な研究テーマはカントの道德哲学であるが、道德を机上の空論に終わらせないためにも、応用倫理という観点から道德理論や正義論の研究も行っている。また近年は戦前の道德教育を支えた「修身教科書」研究も行っている。著書に『教育の原理とは何かー日本の教育理念を問うー』(ナカニシヤ出版)、『反「道德」教育論ークレイトが子供と教師をダメにするー』(PHP研究所)、『正義を疑え!』(筑摩書房)、『平等主義は正義にあらず』(葦書房)、『女子大生のための倫理学読本』(同) 共著に『教育原理』(玉川大学出版部)、『教職概論』(同)、『よく生き、よく死ぬ、ための生命倫理学』(ナカニシヤ出版)、『情報とメディアの倫理』(同)、『男と女の倫理学』(同)、『生と死の倫理学』(同)、『幸福の薬を飲みますか?』(同) 共訳に『健康の倫理』(九州大学出版会)、『環境の倫理』(同) などがある。

ほし の
星野 あゆみ 教授

専攻分野 国際バカロレア教育／バイリンガリズム／帰国子女教育

研究テーマ／主要著書・論文

主な研究テーマは日本における国際バカロレア教育について。国際バカロレア教育を中心に、教育のあり方について研究を行っている。現在は国際バカロレア機構アジア太平洋地域日本担当地域開発マネージャーを担当。

主な著書として *Journeys in Implementation* (共著 国際バカロレア機構)、最近の研究論文として『国際バカロレアの教育で「グローバル人材育成」を行う教師と学校』(明石書店)、『グローバル化教育のめざすものー国際バカロレア校の実践からー』(大修館書店)、『帰国生受け入れとグローバル人材の実践』(一般社団法人日本在外企業会)、『IB ワールドスクールへのみちのり』(東京学芸大学附属国際中等教育学校研究紀要) などがある。

わか つき よし ひろ
若月 芳浩 教授

専攻分野 教育学(幼児教育)

研究テーマ／主要著書・論文

保育の実践と研究の中でも、障害のある子どもを含む保育、子育てに関する保護者支援、保育の質の向上のための園内研究のあり方などについて日々検討している。特に障害のある子どもの保育については、地域の連携の重要性や専門機関の方法論をどのように保育に取り入れられるか等について検討。所属学会等は日本保育学会会員、日本乳幼児教育学会会員、日本自閉症スペクトラム学会会員、子どもと保育総合研究所所属。

著書に保育内容の指導法『人間関係・環境』(玉川大学出版部)『障害児保育入門』(ミネルヴァ書房)、『特別支援教育で育つ子どもたち』(学事出版)、『保育原理』(ミネルヴァ書房)、『保育内容・環境』(ミネルヴァ書房)、『幼稚園実習・保育所・施設実習』(ミネルヴァ書房) など。

主論文は「障害のある子ども、かかわりの難しい子どもを包括する保育を考える」(単著)、「保育者の専門性を育む園文化の探求ー就職後の現場における悩みの質ー」(単著)、「障害のある子どもを包括する保育実践の方向を探る」(共同研究)、「子育て支援における現状と課題ー認定こども園を中心としてー」(共同研究)、「保育者養成における「インターンシップ」の有効性について検証する」(共同研究)。

もり やま けん いち
森山 賢一 教授

専攻分野 教育内容・方法学／教師教育学

研究テーマ／主要著書・論文

研究テーマとしては、教育内容・方法学分野においては、体験的学習に関する歴史的、原理的考察、またそれに関わるカリキュラムの研究を中心にしている。また、「学力」に関する教育方法学的研究・教育思想史的研究を行っている。教育の理論と実践との結合を目指すことによって、教育実践に関する研究水準の向上に取り組む。教師教育学分野においては、教員養成の質保証、教師の専門性と力量形成、教員養成、採用、研修についての教育政策における今日的課題などの研究を中心にしている。

主要著書は『専門職としての教師教育者 The Professional Teacher Educator (翻訳)』(玉川大学出版部)、『カリキュラムと目的一学校教育を考えるーCurriculum and Aims Thinking About Education (翻訳)』(玉川大学出版部)、『特別活動論』(大学教育出版)、『進路指導論』(大学教育出版)、『生徒指導論』(大学教育出版)、『教育課程編成論』(学文社)、『ICTを活用した新しい学校教育』(北樹出版)、『自己成長を目指す教職実践演習』(北樹出版)、『総合演習の理論と実践』(学文社)、『教育学概論』(岩崎学術出版社)、『道德教育』(共著 培風館)、『総合的な学習に生かせるけん玉』(共著 小学館)、『人間科学の継承と発展』(共著 双葉印刷) 他

こ じま さ え こ
小島 佐恵子 准教授

専攻分野 高等教育論／教育社会学

研究テーマ／主要著書・論文

主に、大学の学生支援制度や初年次教育、アメリカの学生支援に携わる専門職員養成に関する研究、教員養成課程におけるFDの研究、大学の地域貢献に関する調査研究を行っている。FDについては、アクティブラーニングやその手法の導入に関する研修会・ワークショップ等も行っている。

主な論文・著書は「高等教育機関における新しい「専門職」ー政策・市場・職能の観点からー」(共著『大学教育研究ジャーナル』徳島大学)、『学校インターンシップにおける学びの現状と課題ー教育現場・学生・養成大学の連携を視野に入れてー』(共著『玉川大学教育学部紀要 論叢』)、『国内事例にみる学生支援の評価:GP事業を例に』(大学教育学会誌)、『修学支援の現状と課題』(『学生支援の最新動向と今後の展望』日本学生支援機構)、『教員養成にかかわる大学教員の資質向上の課題:教員養成を担当する大学教員に望ましいFDの考察』(『Synapse』ジヤース教育新社)、『大学の地域貢献ーCOC、COC+事業に着目してー』(青山学院大学教育人間科学部紀要)、『大学のFD Q&A』(共編 玉川大学出版部)、『大学生生活ナビ 第2版』(共著 玉川大学出版部)、『現代アメリカ教育ハンドブック』(アメリカ教育学会編 共著 東信堂)、『初年次教育ハンドブック 学生を「成功」に導くために』(共訳丸善株式会社) 他。

入学者受入方針(アドミッション・ポリシー)

本研究科では、以下のような学力並びに意欲を有する人を受け入れる。

1. 本学教育学部を卒業した人
2. 他大学において教育関連学部を卒業した人
3. 上記1及び2と同等の学力、基礎知識を有する人
4. 上記1、2、3のいずれかに加えて、教育学研究並びに各教育領域と教員養成課程に係る実践的な研究に意欲を有する人、及び教育に係る高度専門職に必要な知識・技能の修得を目指す人。

大学院奨学金制度について

学業を進めるためには経済的負担が伴います。アルバイトなどで必要経費の一部をまかなうという方法もありますが、過度のアルバイトは、学業に支障をきたしかねません。そこで学業優先の視点から、必要な経費の一部を確保するための経済援助「奨学金制度」があります。奨学金には給付(返還義務のないもの)と貸与(返還義務のあるもの)とがあり、それぞれ条件が設けられています。例えば、学内奨学金(給付)は、奨学金を受け取るには学業、人物ともに優れていることが条件となります。

学内奨学金(玉川大学大学院 全研究科対象)

奨学金名	募集時期	対象学年(定数) 金額	主な条件	期間
大学院 奨学金	4月	修士1年生(25名) 年額20万円(給付)	学業的・人物的に 優れているもの	採用年度 (1年)
		修士2年生(12名) 年額25万円(給付)		
		博士(10名) 年額50万円上限(給付)		

このほかにも、日本学生支援機構の募集する大学院生を対象とした奨学金(貸与)などもあります。詳しくは入学後、学生センターにお問い合わせください。

修士課程長期履修学生制度について

修士課程長期履修学生制度とは、職業を有している等の事情により、各自の都合に応じて修業年限を超えて履修を行う制度で、3年・4年コースがあります。志願者の勤務の都合や通学の便宜等を考慮して導入されましたが、基本的には1週間(月～金)フルタイムの勤務がある場合、授業を受講し単位を修得することは極めて困難となります。あくまでも通常の2年間の修業年限を超えて履修する制度であり、その意味では1週間あたりの通学日数が多少緩和される程度と考えてください。また、各研究科とも3年・4年コースの学費等納付金は単位制となり、総額は通常の2年の課程とほぼ同額となります。

1 対 象

- ①有職者(正規雇用以外の者を含む)
- ②家事・育児・介護等の従事者
- ③その他やむを得ない事情を有すると認める者

2 履修年限・在学年数

- 3年コース(在学年数は4年を超えることはできません)
- 4年コース(在学年数は5年を超えることはできません)

3 履修登録上限単位(年間)

	1年目	2年目	3年目	4年目
3年コース	12単位	12単位	なし	—
4年コース	8単位	8単位	8単位	なし

4 履修年限コースの変更

出願時に届け出た履修年限コースの変更は、原則としてできません。

- 本制度の詳細は大学院入学試験実施要項で確認するか、または入試広報部(042-739-8155)に直接お問い合わせください。

大学院学生学会発表・参加旅費助成について

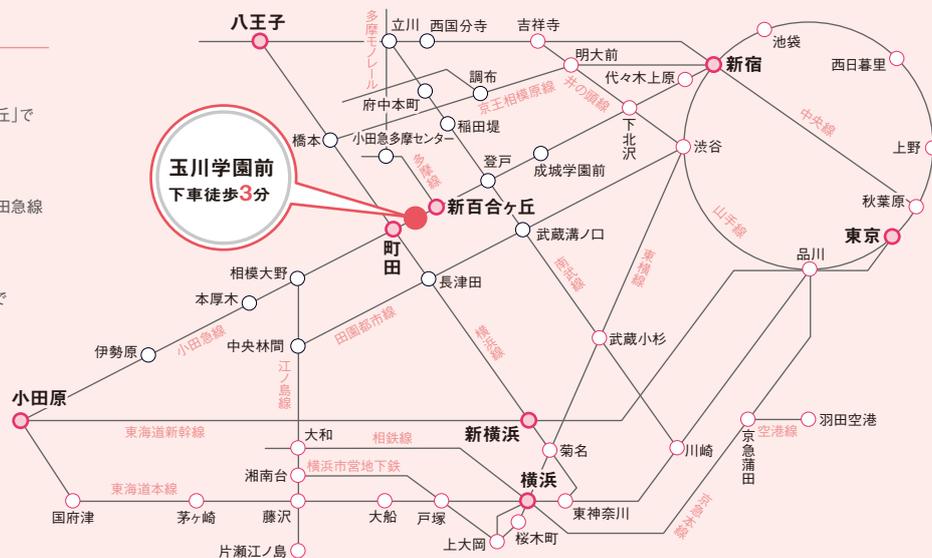
本大学院では、大学院生が自己の研究成果を公表することを奨励するため、学会発表・参加旅費の助成を行っています。

国内の場合は学会発表・参加、国外の場合は学会発表が助成の対象となります。

Access

小田急線「玉川学園前」駅下車

- ▶新宿より小田急線の快速急行に乗り、「新百合ヶ丘」で「各停」「準急」に乗り換え。
所要時間 約30分
- ▶横浜・八王子よりJR横浜線に乗り、「町田」で小田急線「各停」「準急」に乗り換え。
所要時間 約45分・約40分
- ▶小田原より小田急線の快速急行に乗り、「町田」で「各停」「準急」に乗り換え。
所要時間 約60分
- ▶羽田空港より京急空港線に乗り、「京急蒲田」で京急本線に乗り換え「横浜」へ。JR横浜線に乗り換え「町田」で小田急線「各停」「準急」に乗り換え。
所要時間 約90分



Information

大学院に関するお問い合わせ・出願書類の請求は下記まで

TEL 042-739-8155

〒194-8612 東京都町田市玉川学園6-1-1(入試広報部)

土曜・日曜・祝日及び下記の期間は休務となります。
8月22日～9月3日(夏期休暇) 12月23日～1月4日(冬期休暇)
*その他、学園行事及び入試広報部諸行事で休務となることがあります。ご了承ください。

www.tamagawa.jp/graduate/